



近代  
世  
夏  
談  
五

1 福  
998  
5 止



本朝世事談綺卷之五目錄

○人事門

先生 苗字 普請 大系女脚祥事 拜鳥躍 里歸 月代 采和  
觀世鏡 髮結床 勝山結 傾城 道中馬駕替事 大工左官 佛工 蘇醫  
人參切能 蔣繪 尾工 池新金佛 上頭 辰松風 太平記讀 岡十郎艾



○ 雜

飛馬立 一里塚 本曾路 弘基木 同屋 輿擣 元與才 四十二 茶湯 線香

夏門 辻占 田圃 渡杭 大名行 這入 小兒 鄙葵 子生月數 笈摺 人字訓

假山 東下高 長崎港 水車 雜役馬 摸具和 捉迷藏 一石云事 百萬遍 日刊

今朝世事談綺卷之五



人事

○ 先生

礼記曲礼註云先生之德制而人从之 郷にして師いた父兄のあ 故に先生を尊ぶ 物なり人を尊ぶ 人てこれを才子とてし

○ 敷醫

世俗未熟の敷をいして敷醫といふ 本原野正醫 ぬき薬功よりいひ加持ぬをいして病を癒さる

菊岡沾原述

○  
人<sup>に</sup>多<sup>く</sup>切<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>

苗字

住をく仁木細くあひて必字と子あまなり

○佛工

常非佛師の祖に康高より人なり  
 光孝帝の裔なり  
 凡傳より後ある清水寺の別處となるを佛師の始とす  
 佛師綱佐に定朝よりする

光孝天皇  
是忠親王  
英我王

康行日向寄

康助  
京佛師ノ祖

康高

定朝南齊傅師社  
叙法橋是佛工綱立始

定朝才亡世を運慶と云ふその子湛慶父子とも日本  
佛作の好なり京大佛作方京に康助の裔し  
不<sup>ちよ</sup>の佛作は皆京助定朝の條流なり又<sup>ちよ</sup>流  
孫金佛作ありい<sup>ちよ</sup>流に<sup>ちよ</sup>なり



元の唐草もあましく正統所殿は流巴いふ城より  
 いるあましくつむきあはる新ぢう一の六角からあまを  
 する天井鴨居蛙脰をくさる水の路をみる  
 堂塔は龍雲水を畫もあはるけしき金で火雄  
 を避るの夜半し

○大原女おほはらをんな脚あし襪はきをは茶ちや子こ合あ掌てのひら

平相國の女建礼門院世をとりひて大事なりき  
 所なきふ居心侍。わくの建礼を賣て多  
 ぎとふ所をとりひてふく官女なれど御侍を  
 く事をとりひてむすも合せしむるよりめ  
 今に建礼を賣女むふ彌めて合せしむけは風し  
 舊所の平生の幸先院と云僅なる草葺なり

本<sup>ほん</sup>意<sup>い</sup>義<sup>ぎ</sup>喜<sup>き</sup>薩<sup>さつ</sup>太<sup>たい</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>門<sup>もん</sup>漢<sup>かん</sup>の<sup>の</sup>湯<sup>とう</sup>氣<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>  
 ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ぞう</sup>あ<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>女<sup>にょ</sup>漢<sup>かん</sup>の<sup>の</sup>湯<sup>とう</sup>廟<sup>びやう</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>  
 乃<sup>の</sup>乾<sup>かん</sup>の<sup>の</sup>湯<sup>とう</sup>氣<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>湯<sup>とう</sup>氣<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>湯<sup>とう</sup>氣<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>

藏人等歌合

左炭子  
大原牛

○道中馬加番半

一寺にてもとをりて小系ありもをりて入るの  
 道中馬加番事  
 相傳へ慶長の頃京大付のる。の科多子茶店あり  
 奴茶店よりいれ老え来織田家の下部なりし  
 けりて一て世をとりてそのころいけあり廣野  
 ありて茶店のもなりしと云い武家より一  
 あり引能なるの茶具をわたり。越中より性来乃  
 親人なり。里よりわたりなりとせしなりよめて京

大津の土人等早くと集軒は未む。は奴中奴を  
して双方道の遠近をどうり荷物の軽重に  
ふり目をおぼしめて馬作興の世話とする  
事。年あり馬士等早の病より早く候を  
てあきよりまじい海より早く今仕事人なり  
その奴茶屋今あつて器具をさぐる

○泡新念佛

葛西の土人証太報に書をすえて確念佛を  
江戸の大橋に御座るを葛西念佛と云泡新と  
るより実水の云泡新と云人の法所あり  
所を奔る人あつて新達に泡新と  
もやう今ふくむありて新達の名目なり

は泡新と云ふて確より異なりしを  
を新しむ。の葛西念佛は一極あり  
方ありあつてありてをうかると又一人  
尻をうてそのむくくしきさる物  
ありきまゝぬきぬき泡新坊の確に  
くより泡新と云ふ病に新達念佛  
確よりきなり

○新馬躍

寛永の頃法より疫病あり常陸國新馬の神  
興をぞして水に水を浴び疫病を  
その患を深くするを是を憶て確む世に  
とひて法に流布に乞ひし



傾城

傾城をさして傾城とて寛文のころより  
 ひとてとて傾城に神佛の形をあらわして  
 のりて毎朝はあまの女がうきをうけて  
 式人の云平があまの女がうきをうけて  
 下の関門司のあまの女がうきをうけて  
 をさして傾城とて寛文のころより  
 ようて傾城とて寛文のころより  
 虎背のあまの女がうきをうけて  
 傾城とて寛文のころより  
 哲夫成城哲婦傾城婦有長舌惟厲階  
 女乃桑家

武部の家めて記て来ける歌云小方子  
佳人ありて独立一ふ顧む人の城を傾  
再ふ顧む人の城を傾く下略者の徳をとりて  
巨柁なる者ありて名をとりてし

○上頭

娼女ありてあそぶを水とて云俗めり  
商人の荷物ありてあそぶを店に出入る  
あそぶをいふは妓女の色を街をむるをいふ  
こゝに毒叢談曰女子既に并みあつて上頭と  
しこれに并みあつて并みあつて日本に女子  
多きところのひて後髪を敷きけりて業をいふ  
事ならんといふもあらせてしもの

○里歸

婚姻の二日めきて親婦父母のあひれ  
もあり五難姐云漢の女は二月に男女合し婚姻  
をさるる五月五日の親のあひれ又母をいふ  
歸寧といふ大月の子の後の女婿といふ又母の  
あひれをいふはこれに日本にもある事ある  
その中へいふもあらせてしもの

○俗名

女の髪は俗にありて又俗の頃吉原巴風の俗に  
いふ女中いふもあらせてしもの又俗にいふ  
俗田の名の女は俗にいふもあらせてしもの  
いふもあらせてしもの

○辰松

男其の髪をゆひや時世く髪をさへし  
 ぬかり又周くすもその髪はあり  
 とてス結をあらく長く髪月代をあら  
 たりわけ曲の髪をあらく風あり辰松の形を  
 あれどあをのく曲の髪をあらく  
 ゆきし風頂をあらくするてうをそ髪をあらく  
 らんそ曲をあらくうわけ常の髪をあらく  
 なるそ髪をあらくうわけ常の髪をあらく  
 うみる頂髪早結の髪をあらくするてうをそ

○月代

月代を剃すハ孫金小系執権の頃  
 相傳フ  
 泰時頃

その昔ハ本朝の尊皇降臨  
 山海經曰東海有黒国其俗婦人  
 素悉黒漆足本朝の事ハ貴賤一統  
 云云と記すハ本朝の事ハ貴賤一統  
 事を禁ぜしむる事ハ貴賤一統  
 ときりけりて月代を剃るハ又孫金  
 時代の髪を抜くハ信長公の時ハ剃刀ハ  
 梅ノ髪をぬくハ顔の事なりハ剃刀ハ  
 眉剃とて神の宮庭に始まるハ眉剃ハ貴人ハ  
 乃眉を剃具あらくハ信長公の時ハ  
 大さうして今の剃刀なりハ  
 堂上方ハ元服ハ眉を剃りハ本朝上代ハ

漢人今堂と云ふところの漢人の

○發結床

江戸の如く大高れ場六所（江戸の如く大高れ場六所）の側（側）の床なる所（床なる所）入國（入國）乃（乃）初（初）町並（町並）もまじりなり。一、高れ場の番所（高れ場の番所）に移りて所（所）をわける所（をわける所）謂六ヶ所ハ日本橋常盤橋筋遠橋浅草橋  
新田芝牛所あり

○太平記讀

江戸ありハ見解の清な事と云ふ始（江戸ありハ見解の清な事と云ふ始）し年外浅草や門  
傍より出て太平記を讀むといふものハ理を抄と云ふ大平記の  
海老の書をハ讀みたり又その以赤松青龍軒といふ書  
隅田の芝居をハ示昌元といふ書にて軍記を讀むと  
京都といふ所永徳といふ書世の理を抄といふ書ハ

寛永のころ北國ハ法親王印目勝といふ所ハ和名考と  
長年ハ遠縁よりつゝといふと作より千後大全国  
りといふ所ハ参考太平記を讀中より

○栗和

近世大明の陳文寶といふもの本邦より江戸麻布  
國正寺の寓所の所蔵目録多馬浦と云ふ所蔵書と  
と云ふ之の書浪人してかの寺よりあり元寶といふと目  
大明の人を捕ふ所ありそのなかにあるものもその  
ありと云ふ所ありといふと云ふ三人の士との書集と云ふ  
ををすまいてあのかの書をよりを本邦の如く

○觀世繼

文明のころ觀世阿弥式三毒の翁ハ鳥帽子の頭緒



○辻占

衆列現より半程なる故地より市所湯原所と云ふ  
の大小路の辻を占ひていふに、振泉乃境目南川の分岐  
なり、古く安徳清明寺所を過ぎて後世のたふふと占の  
書を埋めたりといふ所へは辻より安く吉吉を占ひて違ふ  
なり、是辻占の起源なりと云ふ、法に依りて半と云ふ

○假山

日本紀推古帝の御時、石濟國の仕人、諸子千といふ  
ものよりいひて、半程の山をいふは、振泉流と云ふ流  
の二流あり、天龍寺の国祖夢窓國師、水を喜ぶ  
天龍寺の妙ありを、振泉流と云ふ、天龍寺、臨泉寺、西寺、  
乃假山といふ、此所の作し、大徳寺の天門院、東の雙林寺の

假山、東の後の臺、朋真、祠の所、此の山をいふ、此の山、  
なり、龍泉寺の夢窓の細川、勝之の作、云々

○一里塚

正親町院、天正年中、一里の行程を定め、此の寺  
六合を表して、二十六町を一里といふ、法に依りて、  
なり、いひて、いふ、松林をいふ、いふ、信長をいふ、  
なり、作の山をいふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
一里といふ、一里の法、いふ、いふ、いふ、いふ、  
一里といふ、一里の法、いふ、いふ、いふ、いふ、  
を伸、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
を伸、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

六町一里の所ありては豫金の七里が所  
ありて六町一里の割しつゝなりて之を  
元日の奏賀大極殿よりおの作の通より  
十里余あり是今の一里し

○田圃

孝徳帝の二年よりて戸籍計帳廻り收授の法を  
作る田長二十歩廣さ十二歩これを五と一は一步は六  
なり中古の法は六尺を五と一は一步は六尺  
天正年中に改りて復六尺の古法なり

○東川高瀬

寛文の無きより慶長十六年に南金より  
所と記しより



○本曾洛

和漢三才圖會云大明帝初和漢年甲子本曾洛を  
平く強はば新道と云ふ漢の國の角今佐治の属  
所基菩薩法圖を巡り一此土記と云ふ日本  
國もいづれにけり

○漂標

漂標の事し漂の如く標の如く一の本  
延喜式卷才辛云凡難波津頭海中に漂標  
若百舊標折折搜求拔去云難波の漂標  
新撰國史云難波に於て漂標を建し  
後撰 難波の如くありて難波の如くありて  
後送 難波の如くありて難波の如くありて

○長崎港

異國の高船上の難波の物多し云云二百年の如く  
國防式に云ふ後の府藩の如く難波の如く  
つゝ云ふ元龜年中肥前長崎の如く  
始に漂の如くし大坂より海上九百四十里

○仙臺米

奥羽米江戸入津の如く寛永九年なり云々  
おとめと云ふと諸家深結縁と云ふ

○大名の如く

お徳信長云の天明日富と云ふと  
人叔を定めいねを授けしもの  
ハの如くなりし常一は勢ありて

○水車

元長六年、細公良海、毎世ある事を傳へ、  
の資とて、河、平明の河、あし、毎世、  
の子、淳和帝の御才、始、良海の姓を賜ふ、  
書を、  
龜、  
入、  
水車、  
の室、  
水鏡、  
と、  
百代、

○問屋

え、  
今、  
今、

○這入

居室、  
の、  
今、  
あ、  
海、

○雜及馬

把、  
子、  
子、

報返の牛あり杞牛の米車に用ひず報復する  
人なりと云ふ世人報復の心と馬の如くして牛より

興携

後多相院文治三年建仁寺の宋西和尚来り  
建久二年の賜る禅法を弘め建仁二年に洛建仁寺を  
する大材をよる宋西人まに下をて我々の心  
てあぐとて心とく唱へてこれなる  
蒙賜号千光院師とて建仁寺の開祖なり

僧都

依中国湯の寺の玄賓僧が民家奴の海田に  
りて心を導き事を辨して民の苦を  
解く人として名を著る農具の如く

小児

世俗の吟を吟と小児と云ふに  
を供と菓子の童女の未婚せる若年男女  
より汲求て心を月の一献に  
所を来と酒を入るを居る名を菓子の女官  
より酒をよるを菓子の童女と云ふ小児  
より酒をよるを菓子の童女と云ふ小児  
難の酒を体と又陪膳するて上へ供と云ふ  
よめてけりあるを小児と云ふ小児

撰具和

毛負無付の吟と云ふ一名吟又野合と  
よ大は毛色能産いひく肉朝けて



○提遠藏

小児のたゞりとは肉を中へいぢりて血を然るるを  
日本めて七十八年朱の天子の御女ありて  
致遠難組日唐のそふと楊貴妃恒の候月を  
あて錦の帕といふ月をうけ其る方丈をうけ  
五のお提ををあるひては金糸をたぐる事  
なれとも楊貴妃その難うくてもあつて上候  
帝をうけしる事多し満宮の人をたぐる事  
も是を提遠藏といふ日本のめりて  
○四十二厄  
本候よりなれ事し四十二と云ふ文ありき  
よりいじきしる事又男子は十一歳血がらる

男子は女子は陰の数をいふをさし  
八歳より血氣を海り十六歳より精血を  
く八歳より血氣を五八歳より血氣満  
十一歳より血氣を十歳より血氣を  
十六歳より血氣を十六歳より血氣を  
七歳より血氣を十四歳より血氣を  
五七三十五と血氣満をいふに七と四十九  
め血氣をいふに懐胎中

○子生月數

人十月に生馬十一月狗三月猪四月  
援五月奔六月虎七月喪八月  
九子家語

○一石ノ事

後醍醐帝延元年中に斛斗を倍しむ斛  
十斗なり石をさかして斗をたぬとて一石  
とす

○茶湯

世傳佛ノ茶を供ぜるを茶湯といひて一物  
もさる元々二物なりて茶ハ茶湯ハ茶湯の  
事めて別し茶湯といふ茶湯ハ茶湯の  
おのれを湯に添えて飲むを湯といふ禪家  
もさる用なり

○笈摺

元帥讓なり性古い父母の菩提やめを妻被

の月ノ親も大日を祀せる人妻被をよめた  
つゝ後ハ妻の祀はりて今も祀はる人  
の御もさるつゝさつとさる禪の字を讓の字  
よめりてさつとさる又今も摺といふて  
一縁も明なり

○百石通

後醍醐帝の元弘元年七月ノ疫病もさる  
知恩寺才ハ世宣國善河上人ハ勅して厄難を救  
ふこの方法を勅しむ十時善河余法を御せ  
沐浴の事號百石通杯念も時も應て苦痛  
たりし人氏も余を御するの時  
天子より弘法大師の御子利親の名を賜ふ

今も猶百万遍の冥宝に後後花園院の  
文安二年八月廿九日寛正二年八月廿九日  
天下疫癘流行の時勅ありて百万遍を修せ  
異感當るを以て今も疫病多し時を修め

○綴香  
五後一官に云者振列るは子の一官長壽とて

子一官に後清の公案と云因姓希に偶に福建に  
至後又も修る年元禄年中寂勝王經曰請說法

者昇座之時便爲我等燒衆名香供  
類是經世尊時香烟於一念頃上昇

虚空即至我等諸天宮殿矣  
燒香の法修るの事とて人間の具乳を澤く

少くも諸天來りて三寶の加持ある  
かゝる燒香とて大論見

○人字訓

人とは一ツの心臓の事し人万物の  
目する所の義日月精靈なるを以て故に人の神魂  
は火氣の屬する日の字の音に於て一の字を以て  
人天地の靈一と日輪の徳を以て人今一を  
離れ大と一と一を離れ天と人今二物を  
わけて天地同一神なり風と天地人と云し

此の如く云ふは人なりあるを以て其の要式云ふ  
中より人謂天高謂地廣と云ふお説を以て天  
地の界を隔たりて人海人の起るを以て

とあるより久米田賀朝子執事

謂天高踏

天高——さうさうさうも百合の花 十

謂地廣踏

廣さうばあやする是や田草取 貞佐

天時不如地理

地理不如人和

人のわいさくさう作のさう 治涼

あそこはのちのちさういふ所は那知の癖さ  
とてさう人の周さうさう紙を費さ

大尾

五之巻軸

# 后序

夫衡ハ推より始め車ハ輿よりまはる

漸りて權錘をその二重代の量

目以元緒よりその二重代の量

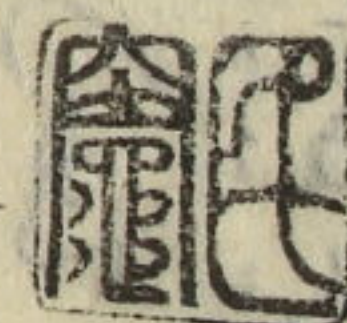
る中世ハ輪輻蓋輪を滑一切は

事物億万の中ハゆふふを指

當の臺ハ解くは山さ世の事

談ハムレヒ多イロトルヤ綺イロトルヤ其ハムレヒ其イロトルヤ題號ハムレヒ而已

東都神田誂林雀下沾涼書



享保十九甲寅天正月吉辰

江都音林

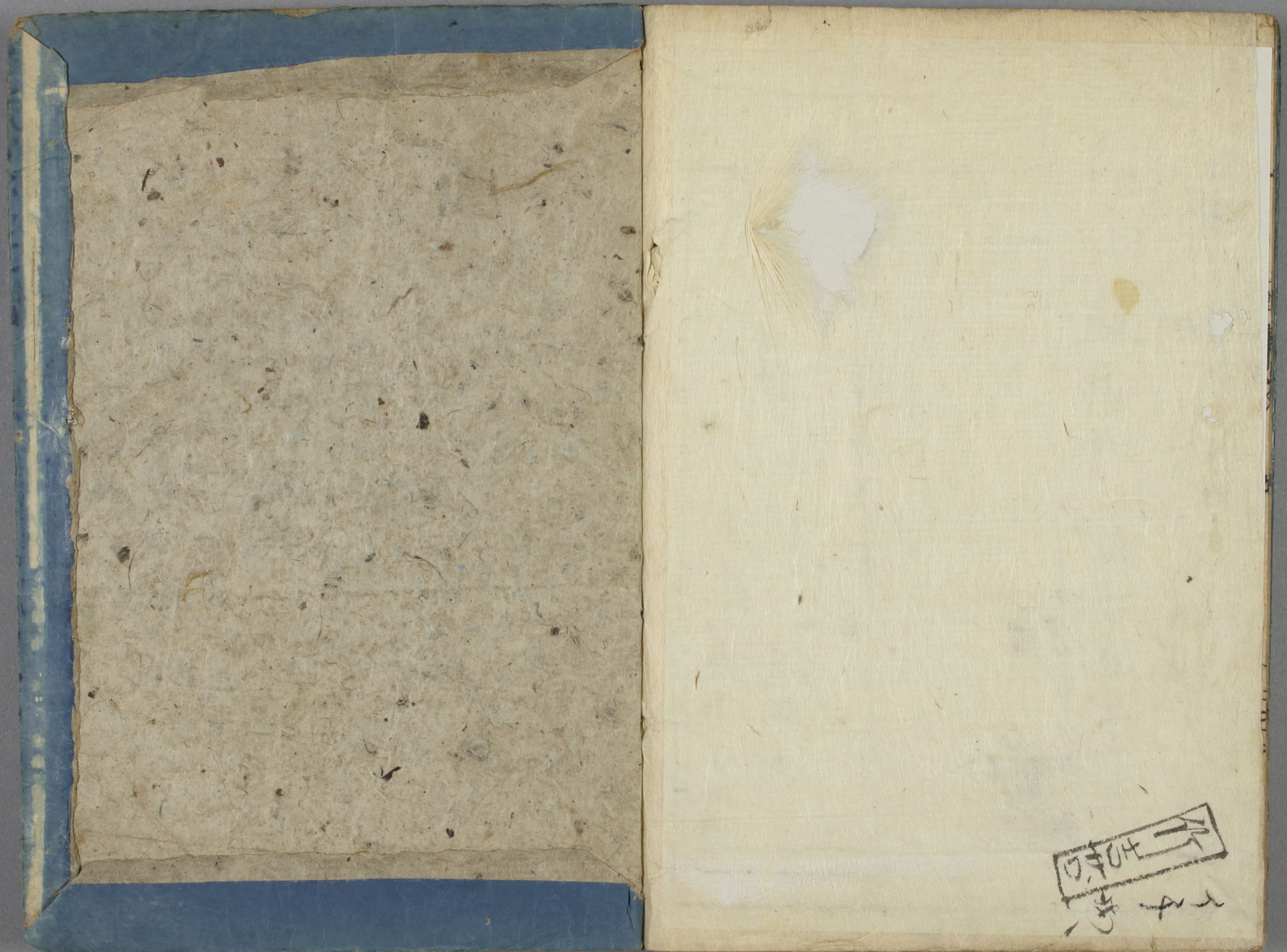
芝濱松町三丁目

藤木久市

芝切通

中村小兵衛

天保十九年  
八月



10.5.04  
14.4.1

